The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	情報活用基礎を担当して
Author(s)	中村, 泰
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2013, 14, p. 38-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70354
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

情報活用基礎を担当して

中村 泰 (未来戦略機構/大学院基礎工学研究科)

はじめに

「情報活用基礎」は大学に入学したばかりの 1 年生に向けた授業で、メディアリテラシーなどと共に、PC の使い方や大阪大学の電子図書館などの使い方を扱うものである。最高学府に入学した学生には、研究者を目指すにせよ、実社会でリーダーとなって活動するにせよ、情報を集めて噛み砕き、自分の意見をまとめ、それを発表する能力が必要とされている。近年の情報社会、特にインターネットの発展した時代では、コンピュータをツールとして駆使することは、その第一歩として重要なことである。そのようなモチベーションで 2010 年度より、4 年間担当してきた。

授業を担当した感想

授業では、特に、技術的なレポートや論文を執筆するのに必要となるであろう技能として、説明するための図、データを処理しグラフを描画するための数値解析ソフト、そして、文書をまとめる組版処理ソフトとして、Gimp、Inkscape、 Octave と LaTeX を用いた。これらを用いて与えられたテーマのレポートを作成し、その後、プレゼンテーションにより意見を発表するということを目標とした。

授業を行う中で感じられたのは、近年の受講生が生まれながらのディジタル世代だということである。私が大学に入学したのは Windows 95 が発売された時期である。一方、現在の 1 年生は中学生の時代には世の中の情報機器を一変させたとも言えるスマートフォン iPhone (2007 年) が発売されているし、インターネットに至っては物心が付いたときには既に一般的になっていたのではないだろうか?

そのような彼らは、私とは異なり、基礎工学部という工学を扱う学部に入学した学生でも、“コンピュータを使う” こと自体には特に興味を持っているわけでは無いようである。そして、インターネットでの検索など、情報機器を使いこなすことはできるのに、例えば “フォルダ” といった基本的な概念については知らなかったりするのである。この、私から見るといびつとも思える彼らの技能は驚きであると共に、情報機器に関する教育で注目するべき点なのではないかと思う。

近年の情報機器はユーザーフレンドリーになってきており、技術により背後で蠢く有象無象を覆い隠し、ある意味で “使いやすい” システムを構築している。一方で、ユーザーではない工学系の研究者・技術者は、その覆い隠された有象無象の中身を理解し、新しく作り出す必要がある。過去の全ての技術を知り尽くすことは不可能かつ非効率であり、求められているわけではないが、なぜ・どう動いているのかを一定のレベルでは理解する必要はあるだろう。構造化文書 (LaTeX や HTML) などはその一端を垣間見ることができる内容ではあるが、例えば、HTML で言えば、直に記述するよりも遥かに豪華なページを世の CMS などを使うことで作れてしまうのである。そのような状況でどのように学生に対してモチベーションを与えるのかは大きな課題であると考える。

この課題に対して解を持っているわけではないのだが、ややもすれば数年で全く使い方の変わっていく特定の情報機器の表層的な使い方そのものを学ぶのではなく、インターフェースが変わっても変わらない人間の作り上げてきたものの本質に興味を持たせることはとても重要であると思う。人間には操作できない法則に従う自然科学とは異なり、技術は人間が作り上げたものだけに本質が曖昧で、変わり得るものではあるが、根底に流れるフィロソフィーを垣間見ることができる、むしろ、直視させるような情報機器を使うことも重要なのではないかとの感想を持っている。

今後への期待

Octave や LaTeX などは、CLI (コマンドライン) 的な要素を多分に残した、ある種旧態依然としたソフトウェ

アである。一方で、使ううちにエラーメッセージに出会い、自分の力で解決し、前に進むことを学んでくれたと思う。情報機器に限らず、そのような体験を通して“なんとなく使う”のではなく、もっと能動的に“このように動かし”活用できるようになって欲しい。そのような考え方は社会を支えるリーダーに必要なものであるとも思う。